研究論文

伝統的都市における民俗の個別性と普遍性
――泉佐野を事例として――

市川　秀之

1　問題の所在

都市が民俗学の対象となりうるかという議論は80年代の民俗学にとって最大のテーマであったといってよい[i]。90年代にはいると倉石忠彦[ii]、小林忠雄[iii]らによって都市民俗研究の成果が次々とまとめられ、都市民俗学は民俗学の中で一定の地位を占めるに至った。そのころから都市民俗学をめぐる議論が次第に熱気を失っていったのは、逆にいえば都市民俗学が民俗学の一部として認知されたためだともいえるだろう。21世紀を迎えても、都市に関する民俗学的研究の数は減少せず、この間に発表された論考の数は膨大なものとなっている。これまでの都市民俗研究の中で大きな比重を占めてきたのは都市祭礼についての研究であった[iv]。また町内会をはじめとする都市の地縁的組織[v]、あるいは都市における口承伝承などの研究[vi]の数も多い。これらはいずれも都市民の共同性、あるいは都市民が共有する心意を対象化した研究といえるだろう。

しかしながらその一方で都市において家を単位として保有される民俗についての研究はきわめて少ない[vii]。村落の調査に慣れた研究者が都市を調査地とした時、まずとまどうのは家ごとの民俗の差異であり、この点こそが都市における民俗の最大の特色といえる。このことは多くの民俗学研究者が実感するところだろう。家を単位として行われる年中行事や人生儀礼などが、それぞれに異なることは、当該地の民俗を調査し、また叙述していく上での大きな障害であったことは誰しも否定できない。しかしながら都市における民俗の一般的特質を考察する上でも、あるいは特定の都市における民俗についての探求していく上でも、この家ごとの民俗の差異という問題は本質的な課題であり、調査の困難さからこの問題を回避したこれまでの研究は、都市民俗のある一面を照射したものに過ぎないといえるだろう。

本稿ではこのような問題意識のもとに、大阪府泉佐野市佐野町場において実施した調査の成果を紹介するとともに、都市における家ごとの差異を生み出す要因について若干の私見を述べることとしたい。

2　調査地の概要

今回フィールドとする佐野町場とは南海本線泉佐野駅と浜との間に広がる地域であり、正式な町名や住居表示ではない。現在の町名で言えば、春日町・元町・本町・野手町・西本町・大宮町・栄町・若宮町などの範囲を指している。本論では地元での呼称にならいこの範囲を佐野町場と表記することとしたい。

佐野は近世には港町として発達し、食野・唐金などの豪商が軒を並べた。また近世から佐野は漁港としての性格も強く、今日でも泉佐野漁業組合が組織され盛んに漁業が営まれている。明治30年（1897）の南海電車開通は佐野の商業港としての性格を大きく変え、駅周辺に商店街が形成されるとともに、タオルを中心とした繊維産業が興隆することとなった。以後、佐野町場は泉南地域の商工業の中心地として繁栄を続けるが、近年では郊外に相次いで大型店舗が開店し商店街の賑わいにもかげりが見えつつある。また1994年の関西国際空港の開港ならびに佐野町場地先の埋め立て地であるりんくうタウンの整備、それに伴う鉄道や高速道路の敷設、南海電鉄の高架化など佐野町場の周辺部の環境は現在大きく変化しつつある。ただこれらの開発は佐野町場の外周部で進行しており、現在のところ佐野町場はその波から取り残された島のごとき感がある。一歩町場の中に足を踏み入れると、昔ながらの町並みが今日も残されており、りんくうタウンなどの近代的な景観とは好対照を示している。

神社としては春日町に春日神社があり、現在は７月の夏祭りには新町・春日町・野出町から太鼓台が出されている。ただ以前は各町に多くの神社が存在

したが、明治41年（1908）には16社が春日神社に合祀され、以後春日神社が佐野町場唯一の神社となっている。

3　調査の方法

調査は泉佐野市史民俗編の刊行にむけた調査の一環として実施された[viii]。この市史の編纂には多くの民俗学研究者が参加したが、数年間の試行錯誤の末、広い市内の中で数カ所を選択し、その地区において集中的な調査を実施するという方法を採用するに至った。佐野町場はこのようにして選択されたフィールドの一つであり、筆者は当初より市史において佐野町場の執筆を担当する予定であったために、この調査に深くかかわることとなった。佐野町場の民俗を調査する際にまず問題となったのは、冒頭に述べた家ごとの民俗の差異という問題であった。佐野町場に先だって、土山、長滝などの農村部の集中調査が行われていたが、その際に採用された年中行事、人生儀礼、衣食住といった枠組みをそのまま佐野町場に導入することは困難であった。いうまでもないことであるが農村部の調査において、地区の全家庭でこれらの分野の項目について聞き取り調査を行うことはない。時には一軒の家で得られた情報を、ある地区の年中行事として報告することすらあるかもしれない。数軒で聞き取りをし、平均的な聞き取り内容を中心に報告をするのがこの種の調査の一般的なありかたであろう。当然のことながらこのような方法は町場では通用しない。加えて村落部と比較して家の数が非常に多いことも町場の民俗を調査していく上での大きな問題となる。この集中調査以前から筆者は佐野町場の何軒かの家で聞き取り調査を行っていたが、そこで得られた情報からも家ごとの民俗には大きな差があることを実感していた。したがってこの共同調査においては、町場では相当大きな家ごとの民俗の差が存在するという前提のもと、まず基本的な質問表を用意し、それに基づいて調査をすることがメンバーの間で合意された。その質問表をもとに、異なった話者に最低限のことについては同じ内容の質問を行い、それを家ごとの民俗の差異や共通性を考える端緒としようというのが、この共同調査における戦略であった。用いた調査票は以下のようなものである。

《佐野町場共通質問項目》

（家の概要）

①生業→個別に詳しく聴いて下さい（個別質問になりますが）。

②宗旨、檀那寺→いつからそうなのか、なぜそこにしたのかまで聴いて下さい。

③家族構成→年齢や性別だけでなく、どこから嫁いできたのか、恋愛か見合いか、どのように知り合ったのかなどを詳しく聴いてください。婚出した人についても聴いて下さい。

（年中行事、信仰）

年中行事全体についてはそれぞれ御質問ください。

④正月に餅を備える場所

⑤正月の仕事はじめに当たる行事（帳初め、初漁など）。

⑥七日盆の行事

⑦盆行事→精霊の送迎はいつ、なにをいつ供えるのかなど詳しく聴いて下さい。

⑧家の中に祀っている神仏→いつだれが祀るか。なぜそれを祀っているのか。

（社会組織）

⑨近所の範囲（イチキンジョなどという）とどのような交際をするか。→地図で範囲を確認し、日常生活のほか年中行事や人生儀礼での交際内容を具体的に聴いて下さい。

⑩講→どのような講にはいっているか。講のメンバーや行事について聴いて下さい。

（住）

⑪家の来歴→いつから住んでいるか。いつ建てたか。

⑫間取り→各部屋の呼び方と使い方を聴いて下さい。土間部分や庭についても細かく聴いて下さい。

いろいろ御意見はあると思いますが、とにかく予備調査のときに一度試しに聴いて下さい。これでも多すぎたと思っています。みなさんの意見を聴いてさらに絞る必要があると思います。一度に全部聞けなくても当然ですから、くれぐれも「流して」聴かないで下さい。できれば聞き取れた内容を、話者がだれから伝承したのかというレベルまでじっくりと聴いて下さい。またその内容が一体いつの話なのか常に確認しながら次の話しに移って下さい。もちろんこれは共通質問項目ですのでこれが終わればそれぞれ関心のある質問をしてください。

この項目は市川が、既存の佐野町場の調査データ

をもとに原案を作成し、調査参加メンバーの討議を経て修正されたものであるが、多少の説明が必要であろう。この調査は統計的な処理を目的としたものではなかった。また佐野町場の民俗を網羅的に把握するための予備調査的なものでもない。調査の主眼は各家ごとのの民俗の概要をひとまずは理解し、家ごとに民俗の差異がみられるとすれば、それは何に由来しているのかを考察することにあった。したがって質問項目は網羅的なものではなく、家ごとの差異が予想される民俗事象に絞って設定された。民俗事象そのものよりも、家ごとを比較しつつ、それぞれの民俗事象の関係性を明確化することに重点をおいた調査を指向したのである。このような調査の前提として、まず家ごとの民俗差を生み出す要因をいくつか措定しておく必要がある。当初から民俗の差異の要因と想定していたのは、生業、宗旨、家族の構成と出身地の３点であった。①から③は話者の概要を理解するために設定された質問項目であるが、これらの項目ではこの３点の把握が大きな目標となった。またこれ以外にも話者のライフヒストリーについては、可能な限り聞き取りすることを調査メンバーの間で了解しあった。

④から⑧は信仰や年中行事を対象とした質問項目である。正月行事については出身地や生業、盆行事は主として宗旨との関連を想定して質問を設定している。この部分が調査票の中心となる部分である。もちろん他の年中行事なども質問項目に加える必要があったが、調査票による調査が佐野町場調査のすべてではなく、それぞれの調査員が自身のテーマに沿った調査を進めるためには共通質問項目を最少限のものとする必要があり、この５点に質問を絞った。⑨、⑩は家が含まれる社会組織に関する質問項目である。この項目は家をこえた民俗の共通性、共同性を把握するために設定したものであるが、もちろんそれと生業や宗旨の間にはなんらかの関連が存在することを想定している。⑪、⑫は住生活に関する質問項目である。町場を観察する限りにおいても、家の立地や構造は生業によって大きく制約されていることが想定されたため、調査項目に含めることとした。本稿ではこのうち年中行事及び信仰を中心として考察を進めていきたい。

4　話者の概要

提出された調査票は多かったが、ほぼ全項目を満たしていたのは18人の話者に関するものであった。家ごとの民俗の差異を問題化する以上、最初に18人の話者の人物像について簡単に紹介しておく必要がある（表１）。人物については記号を用いるが、男女の区別を容易にするため、以下の表記においては男性は○○氏、女性は□□さんと表記する。また市町村名をつけない地名は泉佐野市内のものである。

Ａ氏は大正６年（1917）生まれ。生まれた時から現在まで佐野町場に住んでいる。家は子どものときには製材屋をしていた。自分の代になって石炭の販売を始めたが、戦争中に商売がしにくくなったので、石炭の協同組合を組織してそこに勤めた。その後は晒工場に勤めた。妻は昭和44年（1969）に亡くなったが、岸和田の出身であった。写真屋の紹介で見合いをした。子どもは息子１人と娘２人。Ａ氏は長男とその妻、３人の孫と同居している。長男は銀行に勤め、同僚の女性と恋愛結婚した。またＡ氏の長女は見合い結婚をして今は尼崎にいる。次女も見合い結婚をして堺にいる。

Ｂ氏は大正９年（1920）生まれ。佐野で生まれ。15歳の時からタオルの木管を作る工場に勤めた。現在、本人と妻、次男が同居している。本人の父親は麩屋の職人。もともと愛知県にいたが佐野町場に麩屋がいないのでこっちにきた。妻は愛知県岡崎の出身。おじの紹介で結婚した。長男は結婚して本町に住み、市内の鉄工所に勤めている。同居の次男は独身。娘は３人いるが、長女は結婚して春日町に住んでいる。愛知県のおじのところに仕事を手伝いにいって、そこで知り合った人と結婚した。いとこ同志の恋愛結婚である。次女は既に死亡。三女は同じ会社の人と恋愛結婚して羽倉崎に住んでいる。

Ｃ氏は昭和２年（1927）生まれ。やはり佐野の生まれである。父親の代からの工場を継ぎ、ずっとタオル製造をしていた。現在は本人と妻の二人暮らし。妻は大阪市東住吉区が実家である。祖母の知り合いだった。子どもは娘２人。１人は結婚して長滝にいる。知り合いの紹介で結婚した。もう１人は笠松にいる。こちらも見合い結婚だった。

Ｄ氏は昭和３年（1928）に岸和田で生まれた。昭和16年（1941）に13才で海軍の少年練習兵になる。

表１　話者の概要

名　　前	A	B	C	D	E	F	G	H
性別／生年	男1917	男1920	男1927	男1928	男1921	女1926	男1938	男1931
家族構成（現　在）	直系家族（長男夫婦と同居）	核家族（長男夫婦は他出、独身の次男と同居）	夫婦のみ（女子二人は婚出）	夫婦のみ（女子二人は婚出）	夫婦のみ（二人の息子夫婦は他出、ただし仕事は同じ、娘は婚出）	夫は死亡、長女と同居、二人の息子夫婦は他出、ただ長男が仕事をつぐ。女子は婚出	核家族、二人の女子は婚出。男子二人は？	夫婦のみ（三人の女子は婚出）
一世代前の家族構成	直系家族	直系	直系	直系	直系	？、婚家は文房具商	多分直系	養子で別家（養親とは同居）
夫の出身	佐野	佐野	佐野	岸和田（婿養子）	佐野	佐野	佐野	佐野
親の出身		父親は愛知出身						祖父は和歌山出身
妻の出身	岸和田／見合い	愛知県岡崎市／おじの紹介	東住吉／知り合いの紹介	佐野／祖父どうしが知り合い	徳島／知り合いの紹介	大阪市（疎開、結婚）	熊取／見合い	島根県／恋愛
本人の職業	石炭販売、組合勤務、晒工場勤務	タオル木管工場勤務	タオル工場経営	自動車教習所教官	食肉商	文房具商	布団製造販売	ロス糸屋
父親の職業	製材商	麩職人	タオル工場経営		食肉商	？、婚家は文房具商	布団製造販売	祖父はロス糸屋
次世代への継　承	×	×	×	×	○	○	×	×
宗　　旨	浄土宗上善寺	浄土真宗明厳寺	日蓮宗妙浄寺	クリスチャン。浄土真宗西法寺	浄土真宗西法寺	浄土宗上善寺	浄土真宗西法寺	浄土宗柳泉寺
雑煮汁	白みそ／三日とも	八丁みそ／二日目はすまし	白みそ／三日とも／四日目からすまし	白みそ／三日とも	白みそ	白みそ	白みそ／元旦だけ	
雑煮もち		切餅を焼いたり焼かなかったり			丸もちを焼く	まる餅をやかない	まる餅をやかない	
魚	石鯛				黒鯛（ぐれ）の塩漬け	にらみ鯛	黒鯛の塩漬け	
仕事はじめ	新暦４日から（戦前は旧暦でも休む）	新暦４日から（旧暦は６日から、戦後２～３年で変わる	新暦４日から、半日働く（戦後新暦に）	戦後30年くらいでも旧正月？	二日から、一番の客にこまかぶりの酒		四日。６、７日が初荷	１月２日に仕事始め。７日ごろに初荷の出荷。最初の客に御祝儀として鏡餅

I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R
女1936	女1922	女1935	男1935	男1939	女1906	女1921	男1924	男1930	男1931
	ひとり暮らし。女子は婚出						夫婦のみ。三人のこどもは婚出	夫婦と未婚の娘	直系家族？
直系	結婚時すでに養父母は死亡	次男なので別家		別家	直系	直系	直系	直系（末子だが相続）	直系
佐野	佐野	佐野	佐野	香川（出稼漁、移住）	佐野	佐野	佐野	佐野	佐野
								父親は和歌山	父親は市場から婿養子
貝塚（結婚）	大阪市（結婚）／兄の紹介	佐野／親戚の紹介	佐野／見合い	伊吹島／？	泉南（結婚）	兵庫（結婚）		熊取／見合い	上瓦屋／恋愛
食品商	大阪で会社勤め（亡夫も会社勤め）	呉服屋	漁師	漁師	しょうゆ屋、質屋	履物商	会社勤務	大工	伸線工場勤務
？婚家は食品商	？婚家は元織屋	仕立て屋、婚家は呉服屋		石屋		？／婚家は鉄工業	桶屋	大工	機大工
×	×	×	？		×	○	×	×	なし
浄土宗 上善寺	浄土真宗 西法寺	中之庄の浄土宗大光寺	浄土宗 上善寺	なし		日蓮宗 妙光寺	浄土宗 上善寺	日蓮宗 妙浄寺	日蓮宗 妙浄寺
	白みそ	白みそ／一日だけ	白みそと赤みそのあわせ／	すまし／三日とも	みそ	白みそ		しろみそ	
	まる餅をやく（朝一番にこぶ茶）	まる餅		やかないまる餅（具はハクサイだけ）	焼いたまる餅	まるもち			
		黒鯛などはない	まだいのにらみ鯛			昔は黒鯛、いまはにらみ鯛			
4日	特になし	4日くらい	8日		ちょう祝い（1／11）帳台に帳簿をのせてまつる	初売りは正月2日で、「二日始め」といった。現在は1月4日頃			針金工場の仕事始めは1月5日すこし働いてその日の作業を終えて帰宅したが、手当は2日分をもらった。

そのあと神奈川県横須賀の飛行機偵察の学校に入り戦地にいく。愛知県知多の迎撃基地で終戦を迎え、GHQの命令で南洋の孤島からの引き揚げ作業に従事。その後復学して甲府の航空大学にいく。大阪に帰ってきてから鳳の自動車学校や同じ場所にある整備専門学校で教官をする。D氏は戦後結婚してから妻の実家に住んでいる。D氏の祖父が妻の祖父と日露戦争時の戦友で、仲良くなって将来孫を「やりやい」する約束をした。そのためD氏は長男なのに養子にいった。妻の父は昭和19年（1949）５月に戦死。妻の母は90才で現在入院している。娘は２人いるが、姉は和泉市、妹は田尻町嘉祥寺に嫁いでいる。なおD氏は戦後キリスト教会に入信している。

E氏は大正10年（1921）、佐野で生まれた。大正15年（1926）10月に父親が肉屋を開業した。父親の家はもともと魚屋だったが、肉も置いていた。父親は次男だったので分かれて今の家を買って肉屋を始めた。今は店の２階に妻と２人が住んでいる。妻は徳島県の出身。E氏は麻雀が好きで、麻雀店で知り合った四国の人が紹介してくれた。子どもは息子２人、娘１人。２人の息子は安松に住んでいて兄弟で店をしている。長男の嫁は日根野出身で見合い結婚。次男の嫁は佐野の人で恋愛結婚である。娘は泉南市新家に嫁にいっている。

Fさんは大正15年（1926）、大阪市の曾根崎生まれ。戦争中、佐野に疎開したのが縁で昭和20年（1945）に夫と見合い結婚した。夫の家は文房具屋で現在も長男が店を継いでいる。結婚した時は店の２階に住んでいた。息子２人、娘２人で、長女は独身で今一緒に住んでいる。長男には２人子どもがいる。次男は摂津市に住んでいる。次女は嫁にいって阪南市自然田に住んでいる。

G氏は昭和13年（1938）、佐野生まれ。祖父の代からふとん製造販売業をしている。父親は若くして戦死したので、一時おじが店を継いたが、大学卒業後G氏が店を引き継いだ。妻は熊取町の出身で見合い結婚。熊取町に親戚があってその紹介でもらった。子どもは息子２人、娘２人。みんな結婚している。娘２人は田尻町と泉南市に嫁いでいる。

H氏は昭和６年（1931）、佐野の生まれ。H氏の実家の祖父は、和歌山の農家の出身で、結婚後佐野に来てロス糸屋を営んでいた。H氏は次男で、実家と縁のあった女性の養子となった。昭和24年（1949）に佐野工業高校を卒業してから、実家の祖父のロス糸屋の手伝いを始め、そのままロス糸屋の稼業を継いだ。妻の実家は島根県大原郡で、金の卵として大阪のタオル屋に働きに出てきたのだという。職場で知り合って２人は恋愛結婚をした。夫妻には３人の娘がおり、その中で次女がH姓を継いで婿を取る形となっている。しかし、次女の夫（現在豊中市蛍池に在住）はサラリーマンをしており、家業を継ぐことはないという。また、長女は笠松の男性と、三女は高松の男性と結婚しており、両者ともに泉佐野市内に住んでいる。

Jさんは昭和11年（1936）、貝塚市で生まれた。見合いをし、昭和39年（1964）に嫁いできた。実家は特に商売をしていなかった。夫の家は食料品店で、結婚してからはJさんも店を手伝っている。結婚したころには、義祖母・義父母・義妹が同居する大家族であった。店は現在で五代目であるが、初代以降は婿養子を迎えていたといい、話者は初代の妻以降では始めての嫁であった。なお、先々代は話者の義祖母が家を継いで店の経営にあたっていたという。

Kさんは大正11年（1922）、大阪市内の生まれである。実家の兄が織物卸業をしていた縁で、佐野でもともと織屋をしていた家に見合いで嫁ぐことになった。夫も、婚家の実子ではなく、湊出身であったが、子どものなかった叔母の家に養子に入っている。夫は佐野で会社勤めをしていた。昭和16年（1941）に20歳で嫁いできた時には、舅・姑もすでになく、夫との間に一子をもうけたにもかかわらず、夫は昭和19年（1944）に外地で戦死した。２才の娘を佐野の知人に預けて、Kさんは実家へ帰り、大阪で会社勤めをした。娘は成長して家に戻り１人で暮らした。30年ほど前にKさんも家へ戻り、しばらくは娘と共働きをして暮らした。その後、娘は中庄に嫁ぎ、Kさんは現在１人で暮らしている。

L氏は昭和10年（1935）、佐野の生まれである。家は漁業を営んでおり、中学校卒業後から本格的に漁にではじめた。昭和61年（1986）より、泉佐野漁業協同組合の組合長となり、現在は漁には出ていないものの、息子があとを継いで石げた網漁を営んでいる。

M氏は昭和14年（1939）生まれ。香川県伊吹島出身で、泉佐野へは昭和38年（1963）頃定住した。M氏の父は石屋をしており、伊吹島出身ではない。伊吹島の港を造るときの工事に携わり、そのまま伊吹

島に定住し、伊吹島の漁家の女性と結婚した。M氏は次男で、兄弟が多く、男兄弟だけで５人いる。そのほとんどが大阪に来ている。小学校４年生の頃からイワシ巾着の漁船に乗った。小遣い銭稼ぎになり、漁の技術も仕込まれた。昭和28年（1953）に中学を卒業し本格的に漁業を始めた。昭和38年（1963）、伊吹島で島の女性と結婚し、夫婦で泉佐野に出てきた。泉佐野に来ていた知り合いが誘ってくれたことがきっかけであった。[ix]

Ｎさんは明治39年（1906）生まれで今回の話者のなかでは最高齢の女性である。泉南市で生まれ、現在の家に嫁入りをした。婚家はもともと醤油の製造をおこなっていた旧家で、結婚してきた当時は質屋も営んでいた。夫はすでになく現在、息子夫婦はＮさんの家に隣接する土地に家を建てて住んでいる。

Ｏさんは大正10年（1921）生まれ。アメリカで生まれた日系２世である。結婚前は明石市魚住にいた。夫は１つ年上の佐野生まれで、親の代から履物屋をしていた。昭和20年（1945）の堺空襲の日に結婚した。夫は昭和47年（1972）に死去。現在は独り息子が不動産屋と兼業で履物屋を営んでいる。

Ｐ氏は大正13年（1924）、佐野で生まれた。生家は父親の代まで桶屋であったが、本人は家業を継がず、いくつかの職場を転々としながら、もっぱら事務・会計の職をつとめてきた。父親は亡くなるまで桶屋を営んでいた。Ｐ氏は６人兄弟（３男３女）の長男で、下は長女（宝塚在住）、次男（貝田）、次女（上瓦屋）、三女（和歌山県）、三男（和歌山県）の順である。末の弟とは９歳はなれている。Ｐ氏に３人の息子がいて、それぞれすでに独立している。

Ｑ氏は昭和５年（1930）、佐野の生まれである。親の代から大工をやっている。父親は和歌山県岩出町の出身で、大阪で大工の修業した後に佐野へやってきて、Ｑ氏の母親の家の婿養子となった。Ｑ氏は男５人兄弟の末っ子であったが、家を継いだ。熊取町野田出身の女性と見合い結婚した。Ｑ氏には未婚の娘が１人いる。

Ｒ氏は昭和６年（1931）、佐野に生まれた。16歳の時から伸線工場に40年間勤務した。父親は市場の出身で機大工をしており、Ｒ家に婿養子に来た。本人の兄弟は６人。Ｒ氏は長男であったので、家を継いだ。19歳の時に父が亡くなり、その後は幼い弟や妹たちを自分の子どものように面倒を見てきた。Ｒ氏は18歳の時に上瓦屋出身の16歳の女性と恋愛で結婚する。盆踊りのときに知り合ったことがきっかけであった。本人の姉と妹は、ともに佐野内に嫁いだ。弟はそれぞれ泉佐野市高松、松原市、貝塚市に居住している。またＲ氏には息子と娘が１人ずつおり、娘は愛知県へ婚出している。

以上、話者の概要を述べてきたが、これだけでも佐野町場における民俗の多様性を十分に予想することができるだろう。煩雑ではあっても、これらの人々の生活の有り様を丹念に分析し、それらが総体として織り上げる複雑なモザイク文様を読み解くことが都市民俗研究には不可欠の作業と思われる。

18人の話者のうち男性は12人、女性は６人である。職業は漁師が２名いる他は、それぞれ異なっている。話者の年代は最高齢が明治39年（1906）生まれ、もっとも若い話者は昭和14年（1939）生まれ。1920年代から1930年代にかけて出生した調査時において60歳から70歳台にかけての人が中心である。

5　民俗を規定する要因

（１）家族

前にも記したように、この調査では家ごとの民俗を規定する要因として生業、家族の構成および出身地、宗旨の３つを仮定した。この仮定の妥当性は、個々の事例の検討によって検証されなければならない。以下、この３要素についてまず事例を紹介していきたい。

家族の構成は今回調査した18軒の事例をみる限り、現在では圧倒的に夫婦家族が多い。２世代の夫婦が同居しているのはＡ氏のみである。話者の年齢が随分と高齢であるため、その子女もすでに婚姻年齢に達しているが、子どもがすべて女性の場合、未婚者の同居が２例ある他は、すべて婚出しており、婿養子を迎えている事例はひとつもない。家の継続に対する観念はきわめて薄いというべきであろう。また男子がある場合にもほとんどは結婚後別の家に住む形となっている。ただ食肉商を営むＥ氏の家では息子２人は結婚して別の家に住んでいるが、兄弟はＥ氏が自宅で営む店に通い、商売を手伝っている。またＦさんの家でも、Ｆさんの息子は結婚して別の家に住んでいるものの、文房具商という家業につい

ては跡を継ぐ形で営まれている。親の世代では当然であった職住の一体が、確実に分離の方向へ進んでいる。

話者の子ども世代についてはこのように夫婦家族化の傾向が顕著である。しかしながら話者世代においては、他所から転入してきたM氏、結婚時にすでに養父母がいなかったＪさん、夫が次男なので別に家を構えたＫさん以外はすべて両親夫婦との同居を経験しており、圧倒的に直系家族が多いので、夫婦家族化の傾向は比較的近年のものであるといえる。同世代の夫婦が複数同居する複合家族は話者世代でも、話者の子ども世代においてもまったくみられない。このような近年の傾向が、佐野町場のような伝統都市においても固有の民俗の衰弱や変容に大きく関わっていることは予想できる。

また、既に述べたように現在では結婚すると別に家をもつことが普通であるため、家の相続については不明確である。話者の世代においては長男が家を継ぐのが本来であるとの認識はあったようであるが、Ｄ氏の場合、長男であるのに他家の養子となったり、Ｑ氏のように末子だが家を継ぐといった場合もある。

話者の出身地は11人が佐野で、７人が他で生まれた人である。他所出身の人が佐野に来た理由は結婚が多いが、M氏のように漁業をしていて夫婦で香川県伊吹島から移住した例もある。また佐野生まれの11名にしても父親や祖父が他所から移って来た人もいて、そのことが現在家で伝承されている民俗になんらかの影響を及ぼしている。話者の子どもの世代において居住地の流動性が大きいことは予想できたが、話者の親や祖父母の世代においても流動性がけっして小さくはないことには注意する必要があるだろう。

（２）宗旨

佐野町場には妙浄寺（日蓮宗）、明厳寺（浄土真宗）、西法寺（浄土真宗）、上善寺（浄土宗）などの寺院があり、話者の檀那寺もさまざまである。またこれら以外にもＨ氏は新町の柳泉寺（浄土宗）、またＫさんは中庄の大光寺（浄土宗）の檀家である。佐野生まれの話者の場合、檀那寺は先代からかわっていない。話者の住む地域と檀那寺の関係は非常に複雑で、隣同士でも寺が違うことが普通である。その原因は佐野町場における寺檀関係の形成過程を綿密に調べないと解明できないが、それを考える上でも近年に他所から移ってきた家の状況を見ることは有効であろう。

話者の父親の代に愛知県から佐野に移ってきたＢ家の場合は浄土真宗だったので、同じ宗旨でどこかよい寺はないかと探した。現在は野出墓地に両親の墓を作っている。もともとの家の墓は愛知県にあったが今どうなっているのかも知らないという。またＨ氏の場合は祖父が和歌山から佐野に出てきているが、現在では新町の柳泉寺の檀家となっている。その経過は不明だという。興味深いのはＢ氏の場合である。氏は岸和田から佐野に養子にきている。Ｄ家はもともと西法寺の檀家で仏壇も先祖代々のものがある。ただＤ氏は養子に来てからキリスト教会に入信しているが、現在でも家には仏壇があり、法事などのときには住職が来るという。

事例が少なく結論は出せないが、転入者の場合にはＢ家のように出身地での宗旨に基づいて、佐野あるいはその周辺で新たな寺院を檀那寺として求めることが多かったのではないかと思われる。

（３）生業

話者の代の生業は漁業が２人いる以外はすべて異なっている。商業は８人、内訳は食肉、文房具、布団、食品、ロス糸、呉服、質、履物である。自営の職人は大工が１人、また自家でタオル工場経営が１人である。あとの６人は事業所勤務であるが、その内訳も多様でいわゆる会社勤めは２人、工場は３人、１人は自動車教習所に勤務していた。工場の３人は晒し工場、タオル木管、伸線である。全体としてタオル関係が３人いるなど繊維関係が多いのが特色といえるだろう。

聞き取り調査において話者の親の世代における生業が明らかなものが15例ある。このうち商業は８、内訳は製材、食肉、文房具、布団、ロス糸、食品、呉服、質屋である。職人は３例で、麩、大工、機大工である。職人との区別がつけにくいが、自家での工場経営が３例で織屋、タオル、鉄工である。漁師は１例である。これらの事例のうち話者の親の世代から次世代に生業が継承されているのは９例である。ことに商業では８例のうち７例が次世代に継承されている。ところが話者の次の世代までの３世代

について考えると、３世代にわたって生業が継承されているのはＥ氏の食肉店と、Ｆさんの文房具店のみである。その他の場合には次世代のものが転出したり、佐野にいる場合でもサラリーマンとなっている。戦後は生業を継承することがきわめて困難な状況になっているといえるだろう。

6　正月行事

正月行事がさまざまな要素からなっていることはもちろんであるが、ここでは家ごとの比較が容易な、餅を供える場所および正月料理、とりわけ雑煮について事例をみていくこととしたい。

調査事例のうち餅を供える場所について明らかなものは、表２に示した通り13例であった。このうち神棚には10例、三宝には７例、仏壇、床の間には８例で供えられており、佐野町場においてはかなり普遍的にこのような場所に供えられているといえる。また井戸の６例という数字も今日ではすべての家に井戸があるわけではないということを考えればかなり大きい数字といえるだろう。

次に家ごとの差異とそれを規制する条件の関係について考えてみたい。まず出身地であるが、13例のなかで話者あるいはその１～２世代上の人物が他所から移住してきたことがあきらかな男性はＢ氏（親が愛知県出身）、Ｄ氏（本人が岸和田出身）、Ｈ氏（祖父が和歌山出身）、Ｑ氏（父親が和歌山出身）で、また女性の話者については、Ｉさんは貝塚、Ｊさんは大阪市内、Ｎさんは泉南市、Ｏさんは兵庫県出身である。また男性の話者の場合もその妻が他所出身の人は多い。これらの出身地と餅を供える場所との関係には明確な関連は見られない。

宗旨、および生業との関連については一定の傾向がみられる。生業については勤め人と自営業（商店経営、漁師、職人）などの間に大きな差がある。後者では生業にかかわる空間に対して餅が供えられるのに対して、前者では当然のことながらそれがない。例えば食料品店を営むＩさんの家では正月の鏡餅は、床の間、井戸のモーターの上、釜の上の他に、店、麹室の入り口、ボイラーに供えている。特に主要商品である味噌の仕込みに必要な道具には漏れがないように供えているという。また食肉商のＥ氏の家では神棚、仏壇のほかに、店のケースや冷蔵庫、肉の切断機などにも餅を供える。漁師のＬさんの場合は漁船の船霊の前にも鏡餅を供えている。このことから餅を供える家レベルでの祭祀空間は、生活空間と生業空間に大きく分類され、後者については商店経営、漁師、職人などにのみ存在することがわかる。また商売をしている家にでは店に稲荷が祭られることが多く、そこにも正月の餅が供えられることも特色である。生活空間における祭祀のあり方に、生業の差はそれほど投影されていないように思われる。ただ大工のＱ氏の家では床の間に鏡餅を供えるが、その脇に大工の道具箱を飾り、中に入っている墨壺と金尺を箱の上に取り出し小餅を供えて祀っている。これは外で仕事をする大工の場合、家の空間の中には生業空間がないため、生活空間に職にかかわる祭祀がもちこまれたものと考えるべきだろう。

生活空間における祭祀のありかた、すなわち餅を床の間、仏壇、三宝、神棚、井戸、便所などに供えるか否かという問題に大きく関連するのは各家の宗旨である。宗旨は13例中、不明あるいは未調査の２例を除くと、浄土宗が３例、日蓮宗が３例、浄土真宗が５例である。神棚については日蓮宗の３例のうち１例しか餅を供えていないものの、それほどの差はない。しかし神棚の神以上に民間信仰的色彩が強い三宝や井戸には浄土真宗の家で５例のうち１例しか供えていないことが目を引く。また床の間にも浄土真宗の家では５例中１例も供えていない。これに対して仏壇には５例中４例が餅を供えるという結果になっている。この結果からは浄土真宗の家においては祭祀空間のうち仏壇に対する祭祀の集中の度合いが著しく、床の間や井戸、かまどに祭られる神についての重要度は低いという結論が得られるだろう。これは浄土真宗における他信仰の排斥、ことに民間信仰に対する排除の傾向が影響を与えているためと考えられる。浄土真宗の家でも神棚に祀られる神については餅を供えているという事実はこの推測を否定するように思われるが、これについては神社信仰が地域と深く結びついており、浄土真宗門徒といえどもこれを否定することができないという事情を考慮する必要があるだろう。この問題については後に再考したい。

次に各家の雑煮について述べる。雑煮はこれまでの民俗学研究において地域性の指標として採用されることが多かった。今回の調査でこれを特に取り上

表２　正月に餅を供える場所

名　　前	A	B	D	E	G	H	I	J	L	N	O	Q	R
性別／生年	男1917	男1920	男1928	男1921	男1938	男1931	女 1936	女1922	男1935	女1906	女1921	男1930	男1931
本人の職業	石炭販売、組合勤務、晒工場勤務	タオル木管工場勤務	自動車教習所教官	食肉商	布団製造販売	ロス糸屋	食品商	大阪で会社勤め（亡夫も会社勤め）	漁師	しょうゆ屋、質屋	履物商	大工	伸線工場勤務
宗　　旨	浄土宗上善寺	浄土真宗明厳寺	クリスチャン。浄土真宗西法寺	浄土真宗西法寺	浄土真宗西法寺	浄土宗柳泉寺	浄土宗上善寺	浄土真宗西法寺	浄土宗上善寺		日蓮宗妙光寺	日蓮宗妙浄寺	日蓮宗妙浄寺
神　　棚	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		
三　　宝	○	○					○			○	○	○	○
仏　　壇	○	○昔		○	○			○	○	○	○		
床の間	○					○	○		○	○	○	○大工道具も	○
井　　戸	○昔	水神をまつる			○		○モーターの上			○		○共同井戸の当番が	○
便　　所	しめ縄	しめ縄		しめなわ								○	
墓			○ひとつ										
店				○ケース	○店の台の上								
商売道具				○冷蔵庫、切断機	○ミシン	○秤、机	○糀室、ボイラー			○台			
稲　　荷				○						○	○		
車					○自転車も							○自転車	
船									○ふな玉				
曼陀羅さん											○		

げたのも主として出身地と民俗との関連を考慮してのことである。

雑煮の味付けについてデータを得られたのは13例であった。このうち11例は白みそ仕立てである。白みそは家で作るという例もあり、また町場の店で購入する例もある。正月の雑煮を白みそで味付けすることは、周辺の農村部においてもごく一般的にみられることである。

ここでは例外的な事例にも注目しておきたい。Ｂ氏の家では元旦には赤みその雑煮を食べ、二日目からはすましの雑煮を作っている。Ｂ氏の場合は父親が愛知県の出身であり、またＢ氏の妻も愛知県の出身であるため、その地方の民俗が現在も影響を与えている。またM氏の家では３日ともすましの雑煮を作っている。M氏は香川県伊吹島出身の漁師であるが、伊吹島ではすましの雑煮が現在も一般的である。これらのことから話者の世代、あるいはその上の世代が佐野へ移住してきた場合には、出身地の民俗が長く影響を与えていることがわかる。またこれも漁師のＬ氏の家では赤みそと白みそをあわせたものを使って雑煮を作っている。Ｌ氏の場合は夫婦とも佐野の出身であるので、このようなみそを使うのは出身地の影響とは考えられないが、現在のところその原因を推定することはできない。

さらに雑煮を食べる日についてもさまざまなバリエーションがみられる。Ｇ氏およびＫさんの家ではともに白みその雑煮を作っているが、これは元旦だけ食べ２日からは雑煮を作らないという。両家とも先代から町場で商売を営む商家であるが、他の商家の事例では３日とも雑煮を作る事例もあり、元旦だけの雑煮が生業に由来すると断言することはできない。

またＢ氏の家では先にも紹介したように元旦に赤みその雑煮を作っているが、２日からはすましになり、またＣ氏の家では三ヶ日は白みそであるが、４

日以降はすましであるという。みそ雑煮を主体にしながらも、２日あるいは３日以降にすまし雑煮を作ることは大阪市などの都市部においてよくみられるが、Ｃ氏の妻は大阪市の出身であることからこのような折衷式の雑煮慣行が生まれた可能性がある。

次に雑煮の中に入れる具、とりわけ餅についてみていきたい。雑煮の餅については一般的に西日本では丸餅、東日本は切り餅であるといわれる。筆者のこれまでの調査ではその境界線は明確に関ヶ原附近で引かれる。この件については９例の事例を得ているが、Ｂ氏が切り餅を雑煮に入れているほかはすべて丸餅であった。Ｂ氏は何度も述べたように父親が愛知県出身であり、その影響がこの件についてもみられる。ただ８例の丸餅のうち焼くか否かについては、この点まで聞けなかった２例を除けば、焼くものが３例、焼かないものが３例であった。この点については生業、宗旨、出身などの差異と整合した説明ができない。餅は日を置くと固くなり焼かないと食べにくくなるので、この問題は餅をつく（買う）日や、雑煮を何日まで食べるのかという問題とも関係している。

以上、雑煮について各事例をみてきたが、先の供え餅の状況が生業、宗旨の大きな影響を受けていたことに対して、雑煮においてはむしろ出身地の影響が大きいことが指摘できるだろう。民俗の差異を一元的に説明することの困難さを感じる事例である。

正月行事の３点目として仕事初めについて述べる。この調査項目はいうまでもなく生業による各家の民俗の違いを把握することを前提として設定されている。

仕事初めの日や内容は当然のことながら生業によって大きく異なり、また話者の年令、すなわちその生業を営んでいた年代によっても差がみられた。事業所に勤務していた人々はおおむね仕事初めの日は４日であると回答している。市内の晒し工場で働いていたＡ氏やタオル木管工場に勤務していたＢ氏がそうであり、また自らタオル工場を営んでいたＣ氏も同様である。ただ伸線工場に勤務していたＦ氏については５日が仕事初めであったと述べており、事業所によって若干の差があったようである。また商店を営む人は２日が初売りであったという人と４日だという人に分かれる。２日はＥ氏（食肉商）、Ｈ氏（ロス糸商）、Ｏさん（履き物商）であり、Ｇ氏（ふとん製造販売）、Ｉさん（食品商）、Ｋさん（呉服商）は４日と答えている。Ｈ氏を除く５人はいずれも商店街に店を構えているので、このような違いは少し奇異に思えるが、Ｅ氏は1921年（大正10）生まれ、Ｈ氏は1931年（昭和６）生まれ、Ｏさんは1921年（大正10）生まれであり、これに対してＧ氏は1938年（昭和13）生まれ、Ｉさんは1936年（昭和11）生まれ、Ｋさんは1935年（昭和10）生まれで、年令に15才ほどの差がある。後者の３人が現在の生業に主体的に関わったのはおそらく1950年代後半以降のことと思われるので、初仕事（初売り）の日はそのころを境として２日から４日へと変化したことが推定できる。４日は先にみたように佐野の事業所の初仕事の日であるので、この変化は佐野町場の生活サイクルにおいて生業による差が少なくなり、画一化が進行したことを意味している。その画期は1950年代後半にあると思われる。また商業を営んでいた人の中でもさらに古い世代の話者であるＮさん（1906年・明治39年生まれ）は１月11日にチョウイワイ（帳祝い）という行事があったことを述べている。これは帳台に帳簿をのせてまつるもので、かつては十日恵比須の翌日であるこの日が初仕事であった可能性もあるだろう。また佐野生まれの漁師であるＬ氏の家では１月８日が初仕事である。この日はシオで漁船を浄める日でトリカジ・オモカジの順にシオを撒いていく。

またこの項目において興味深いのは佐野町場の初仕事の日程において、比較的新しい時代まで旧暦が残っていたことである。Ａ氏によると、Ａ氏の職場（石炭の組合・晒し工場勤務）では新暦の４日が仕事初めだったが、戦前には新暦の正月の他に旧暦の１日から５日までの間も両方休んでいたという。この点についてＢ氏（木管工場勤務）は、「戦後２～３年で旧から新にかわった。新正月は３日まで休み。旧正月は５日まで休みであった」と述べている。またＤ氏（自動車学校勤務）は、勤務地は佐野ではないものの、昭和30年（1955）ごろでも旧正月で休んだ経験があるという。当時でも世間的には旧正月はすたれており、子どもの学校などはもちろん新暦でおこなわれていたというが、事業所の中にはまだ旧暦を採用しているところがみられたようである。銀行など金融関係の人は得意先の行事の日が新暦か旧暦かをよく覚えていたという。

旧暦から新暦への移行は日本全国でみられたものであるが、佐野町場での移行は非常に遅かったようであり、ことにそれが家庭の行事ではなく、より全国的なスケジュールとの整合が必要な事業所などの日程に残存していたということは興味深い。その背景の１つとして、佐野町場において、月の満ち欠けと密接に関連する漁業が盛んであったことが考えられるが、それ以外の条件についても考慮する必要があるだろう。

（２）盆の行事

次に盆行事について述べる。盆行事は宗旨によって家ごとの行事に差が生じることが予想された。調査の結果、確かに宗旨による共通性、差異が大きくみられたが、それと同時に生業による差も観察できたのでこれを先に述べておきたい。

Ｅ氏は食肉商を営んできたが、食肉商の場合、盆は正月などと並んで忙しい季節であったため盆行事についてはほとんど行っていなかったという。またＬ氏によると漁師の場合にはふつうの盆行事に加えて、ウラボン（ウラマツリともいう）をしているという。これは浜に小祠をこしらえて、春日神社の神主に祝詞をあげてもらうもので、魚の供養のためであるといわれている。ウラボンの世話をするのは、漁師が多く住む新町・春日町・野出町の年行司である。また漁師の場合の特殊な民俗としてシンボトケをフネにのせ、15日に供物とともに海に送ることがある。シンボトケの供養についてはもちろん他の生業の人の家でもおこなっていたが、このように船にのせて海に送るということはＬ氏のみから聞くことができた。

次に各家の盆行事に対する寺院の関与について、宗旨ごとにみていきたい。

浄土宗の上善寺では８月10日に施餓鬼をおこなっている。この時に家ごとに塔婆をもらうが、この塔婆のまつり方については同じ檀家でも若干の差がみられる。Ａ氏、Ｆさん、Ｌ氏などはいずれも塔婆を15日まで仏壇でまつっているが、Ｐ氏の場合にはその塔婆を一旦お墓にもっていく。Ｐ氏は12日の夕方にお墓に仏迎えをしているが、この時にこの塔婆を家に持って帰ってくるという。施餓鬼行事は寺院が中心となった行事であるが、そこで渡される塔婆をＰさんの家では家ごとの行事である仏迎え、送りの中に取り込んでいる。上善寺の場合はかつて境内に檀家の墓が多くあったので、このような行事に家ごとの差異がみられるのは少し不思議であるが、今のところその差異の原因を推測することはできない。また浄土真宗寺院では盆の間に各家がお寺に位牌をもっていって供養をしてもらっているが、以前は一軒づつ僧侶が棚経をあげにまわっていた。また法華宗の場合には盆の間には各檀家に対する寺院の関与は特にみられない。

次に盆の間の先祖迎え、送りの行事について述べたい。この点については宗旨による差はほとんどみられず、大半の話者は13日の朝に墓地に迎えに行き、15日の夕方に浜に流しにいったと答えている。ただ浜については前島の建設などで供物や塔婆などを近年流せなくなったので墓に送りに行くという風に変化している。ただＪさんの場合は墓に送りにいって供物などは墓地管理業者が用意するトラックに置くこととしているものの、やはり浜にいってロウソクをたてて帰ってきており、かつての行事の名残がみられる。また浄土真宗の門徒のうちＮさん（明厳寺）については仏迎え、送りなどの行事はしないと回答している。ただＮさんの場合も14日の日には、墓に礼装をして詣るとのことである。また浄土真宗西法寺の檀家であるＧ氏は13日の朝に仏迎えはするものの、仏を送る行事についてはおこなっていない。佐野においては先祖の送迎については、宗旨の差はほとんどみられず、墓に迎えにいって浜に送ることが基本となっている。浄土真宗の門徒においては多分に民俗的な慣行である先祖迎え、送りなどの行事がおこなわれていない地方が多いが、佐野ではＮさん、Ｇ氏などのようにしていない家も若干あるものの、多くの家では他の宗旨と同様の行事が展開されているのは興味深い。

盆の間の供物については、聞き取り調査ができた数が少なく数量的な分析は困難であった。ただこれも宗旨による差はあまりみられず、仏の送迎をしていない浄土真宗門徒のＮさんにしても素麺を生のまま供え、その上に麩、しいたけなどを干物のまま置くカラモリという供物のほか、14日はシャナムシというまんじゅう、15日は小豆餅、送り団子をそなえており、非常に丁寧な供物をしているという印象がある。また盆の間たびたび仏前のお茶をかえるオチャトについても、浄土真宗の家でこれをおこなって

いる事例がみられた。

以上、盆行事について概観してきたが、当初予想していたよりも宗旨による各家の民俗の差異はずっと小さなものであったということができるだろう。墓から先祖を迎えて浜に送るという儀礼のパターンがかなり普遍的に観察できたが、このことからは宗旨よりも浜に隣接する佐野町場の立地が民俗に大きな影響を与えていると解釈することができるかもしれない。

（3）家の信仰

家の信仰については宗旨、檀那寺などのほか神棚などに祭祀される神について質問した。この項目についてはデータが得られたのが13例であった。これを見る限り家の宗旨のほかに、生業による差が顕著にみられた。L氏は漁師を営んでいるが、家の神棚には生駒聖天、二色浜の龍神と屋敷神であるミーさんをまつり、台所には三宝荒神と淡島さんをまつっている。二色浜の龍神はある日、知らない人がきて勧められたので祀っているという。また稲荷を祀っているのは３例だけであるが、E氏は食肉商、Nさんは醤油・質商、Oさんは履物商というようにいずれも商業を営む家である。稲荷は商売する人が祀っているということは他の話者からも聞くことができ佐野町場では一般的な認識となっているようである。また神棚に祭祀されている神についても５例については調査できたが、うち４例は伊勢神宮を祀っている。伊勢神宮の大麻は以前町会を通じて配布していたが、現在それは中止され神社から配布される形となっている。氏神である春日神社の札や靖国神社の札をまつっている例もあるが、靖国をまつるD氏は家族や戦友が戦争でなくなっていることから、そうしていることを述べている。

神棚についてはどの宗旨の家でも祀る傾向が強いが、台所に祀る神には宗旨の影響がみられる。三宝荒神などを祀っている話者は10人であったが、その宗旨をみると浄土宗が４例，法華宗が４例、浄土真宗が２例である。浄土真宗の２例はいずれも明厳寺の檀家で、全体で４人いる西法寺の檀家においては三宝荒神などを祀るものはなかった。三宝荒神は、神とはいっても清荒神や立里荒神などの寺院からもらうのが普通であるため、他宗派不拝の傾向が強い浄土真宗門徒については、神祇以上にこれに対する抵抗感があるのだろうか。家の信仰についても神棚のレベルと、荒神などさらに生活に密着したレベルにわけて理解する必要があるだろう。

まとめ

当初予想していたように佐野町場では家によってさまざまな民俗の差異がみられた。そのような差異を生む要因として想定していたのは、話者やその両親の出身地、宗旨、生業などであった。今回考察の対象としたのは家ごとの年中行事や信仰だけであったので、それに限定して民俗を規定する要素と民俗の関係について整理しておきたい。

出身地の影響はいずれの項目でも顕著に観察できた。佐野に家族全体が来住して一世代目においてはいまだ仏壇や檀那寺などもなく、ことに寺院信仰面で在地との関連性はきわめて希薄である。二世代目以降は親世代の葬送や供養を通じて地元で檀那寺との関係が生じたり墓地を持つようになり幾ばくかの関係性が発生している。しかしこの段階でも盆行事などでは他の家との差がみられる。またさらに家レベルの問題である正月の雑煮などでは一世代目はもちろん二世代目においても元の居住地の民俗の影響が強くみられる。

宗旨の影響もみられた。寺院信仰以外の各家の信仰を便宜的に神社信仰、民俗信仰、祖先祭祀に分類すると、民俗信仰レベルの問題、たとえば台所や井戸などにまつる神などは宗旨の影響が強くみられる。ことに浄土真宗と他の宗派では大きな差があり、浄土真宗の家ではほとんど三宝荒神などは祀られていない。ところが寺院の関与が大きいと思われる祖先祭祀レベルにおいては、意外なことに各家の民俗が宗派の違いをこえて非常に類似している。盆行事の基本的な構成に宗派の差はなく、また今回は報告しなかったが葬式なども宗派による差はきわめて少ない。また神社信仰レベル、たとえば神棚に祀る神などの問題についても宗派の影響は少なかった。

次に生業の影響であるが、これも非常に大きなものがあった。ことに先にあげた家の信仰の３つのレベルでいうと民俗信仰レベルの問題に対しては大きな影響が認められた。

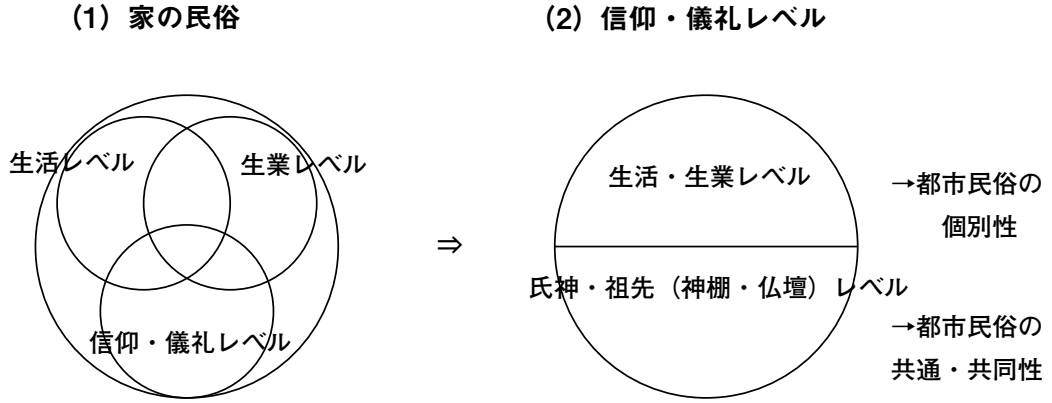
これまでの考察においては、個別の事例に着目し

てきたが、それらを統合し町場の民俗についての包括的モデルの構築を志向しない限り、都市における家ごとの民俗には大きな差があるという既存の通説をさらに追認するだけの結果にとどまることとなる。今回の分析は事例の数量も調査のレベルも不十分なものであるが、若干のモデル化の試みをおこないたい。

家の民俗、すなわち家庭の中で展開される生活文化のなかで一定の様式化がおこなわれている部分は、大きく生業レベル、生活レベル、信仰・儀礼レベルにわけて把握することができるだろう。生業は、勤め人の家庭においては、家の枠外で展開されるが、佐野町場のような伝統的な都市においては、商業や漁業などを営む家が多く、生業レベルの問題も家の民俗の中で大きな比重を占める。また生活レベルの民俗とはこの場合、主として衣食住にかかわる民俗を意味している。今回の分析で主たる対象としたのは最後の信仰・儀礼レベルの問題であった。この三つの類型はお互いに重なりを持ち合い、独立した存在でないことはいうまでもない。図で表現すると図１－(1) のようになるだろう。さてこのうちここで問題とする信仰・儀礼レベルの民俗だけを取り上げると図１－(2) のように表現できる。すなわち信仰・儀礼レベルの民俗のなかには、生活レベルや生業レベルの問題と深く関わるものと、あまりそれらとは関係せず、いわば純粋に信仰・儀礼レベルの問題として存在するものがある。前者については、他のレベルとの重複性を示し、さらに信仰・儀礼レベルの問題であることを明確化するために、ここでは生業・生活神レベルと表現しておきたい。具体的には商家の人が祀る稲荷や、台所で祭祀される荒神などに対する信仰や儀礼などがこれに含まれる。また年中行事のなかでも本論で取り上げた雑煮などは生活・生業神レベルの民俗とすることができるだろう。さきに家で行われる信仰を便宜的に神社信仰、民俗信仰、祖先祭祀とわけたが、生活・生業神レベルの民俗とは、この三者のうち民俗信仰と重なり合う。それでは信仰・儀礼レベルの問題のうち、生活・生業神レベルに含まれない領域とはどのようなものだろうか。それは祖先をまつる仏壇に関する祭祀や、氏神の札をまつる神棚などを中心とする領域で、祖先を祀る盆行事や広くみれば葬式などもこのレベルのなかに位置づけることができるだろう。この領域を祖先・氏神レベルと表現することができる[x]。

このように信仰・儀礼レベルの問題を、生活・生業神レベルと祖先・氏神レベルの二つにわけ、それぞれと先にみた出身地、宗旨、生業などとの関連を考えたときに、それが　大きく影響し、民俗に差異をもたらすのは生活・生業神レベルの問題であることに気付く。祖先・氏神レベルの信仰や儀礼は、盆行事や葬送にみられるように、意外にも宗派や生業の影響が比較的少ない。これは神社や寺院が佐野町場という地域社会の中に存在し、そのある種地縁的な規制が家庭の民俗に影響するため画一的な表象にとどまるためだと考えられる。規制とは具体的には葬送に近隣が深く関与したり、かつて町内会を通じて神社の札が配られたりしたという事例によく示されている。すなわち祖先・氏神レベルの信仰は、家を越えた神社祭祀や地蔵などの地縁的祭祀とかかわる面が強く、それらの共同体的祭祀が家の中の民俗に融合した存在とみることができる。宗旨などは一

図１



見祖先・氏神レベルに関連する問題と思えるが、寺院もまた地域社会の一つの要素であるために、それが直接祖先・氏神レベルでの信仰や儀礼に大きな影響を及ぼさず、むしろ生業・生活神レベルの信仰や儀礼に強い影響を与えるのである。

以上を整理すると、少なくとも佐野町場においては、信仰・儀礼レベルでの民俗でも、氏神・祖先レベルのものは家ごとに共通点が多く、逆に生活・生業神レベルの民俗は、家族の出身地・宗旨・生業といった諸要件から大きく影響を受け、結果として多様な家ごとの民俗をうみだしているというモデルをひとまずは提唱することができるだろう。

このモデルが、佐野町場以外の伝統的都市においても適合するものなのか否か、あるいはニュータウンのような非伝統都市ではいかなるモデルが必要とされるのか、大阪のような大都市においては家の民俗はどのように把握しうるのかなどが次の課題として想定されるが、そのためにも同様の調査をフィールドを替えて継続していくことが重要であろう。その作業の中で今回は論じ得なかった都市ごとの民俗的特色の差異というテーマへのアプローチがはじめて可能となる。

---

i　都市の民俗に対する関心は早く森口多里、宮本常一らによって示され、柳田国男にも『明治大正史世相編』のような作品があるが、宮田登の一連の著作を契機として都市民俗学という言葉が定着していった。
森口多里『町の民俗』三国書房　1944年
宮本常一『町のなりたち』未来社　1968年
宮田登　『都市民俗論の課題』未来社　1982年

ii　倉石忠彦『都市民俗論序説』雄山閣出版　1990年

iii　小林忠雄『都市民俗学　都市のFOLKSOCIETY』名著出版　1990年

iv　人類学の立場からの米山俊直・和崎春日、社会学の立場からの松平誠などの研究のほか、最近では中野紀和などの研究がある。
米山俊直『祇園祭』中公新書　1974年
松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣　1990年
和崎春日『大文字の都市民俗学的研究』刀水書房　1996年
中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学』古今書院　2007年

v　田中宣一編『「町内会」の民俗学的研究』川崎市博物館資料収集委員会　1988年　など

vi　常光徹『学校の怪談』ミネルヴァ書房　1993年

vii　倉石が団地住民の生活文化を詳細に調査したのはこの分野の研究の一例であるが、この領域の研究は非常にすくない。筆者は大阪狭山市の狭山ニュータウンにおいて家ごとの民俗を調査したことがある。
倉石前掲書
市川秀之「狭山ニュータウンの民俗」『大阪狭山市史』民俗編　1997年

viii　民俗担当の編さん委員は八木透氏。そのほかに佐野町場調査に参加したのは以下のメンバーである。牧田勲・松本芳郎・政岡伸洋・河原典史・増崎勝敏・市川秀之・村上忠喜・菅原千華・大野啓・蘇理剛志・藤森寛志・東原直明・東原和代・宮田克成
佐野町場の調査の成果は『佐野町場の民俗』（泉佐野市民俗調査報告書第３集　2003年）に示されている。本稿はこの報告書に執筆した内容に考察を加えたものである。また泉佐野市史民俗編にもその調査の一部を執筆している。
『新修泉佐野市史』別巻民俗編　2006年

ix　佐野の漁民の中には他所から移住してきた人が多いが、ことに香川県伊吹島出身の人が多い。多くはM氏のように知り合いを頼る形で佐野に来ている。

x　かつて高取正男は家で祀られる神を土間で祀られる神と、床の間や神棚で祀られる神に分け、前者を「もっとも古い時代から、庶民の日常生活に密着してきた神々」と評価している。
高取正男『民俗のこころ』朝日新聞社　1972年